史林　第二十五卷　第四號　（通卷第百號）　昭和十五年十月發行

東洋のルネッサンスと西洋のルネッサンス（上）

宮崎市定

內容

一、緒論——三個の世界と三個の時代
二、東洋に於けるルネッサンスの存在
三、最も遲れたる西洋の文化（以上本號、以下次號）
四、東洋畫がイスラム繪畫に及ぼせる影響
五、東洋畫が西洋學藝復興期繪畫に及ぼしたる影響
六、結語　附表二種

一　緒論——三個の世界と三個の時代

過去數千年の人類の歷史を理解する爲に、必然の便宜上、縱には之を何期かの時代區分に分ち、橫には之を幾個の地域區分に分つことが要求される。前者は暫く措き、後者には從來漠然として、歐羅巴と亞細亞、或は西洋と東洋と

に區分されて來たが、余の經驗から云へば、之では著しく不精確であり、不充分であることを免れない。所謂亞細亞は更に葱嶺(パミール)山脈の邊を境として、東亞細亞と西亞細亞とに分たれなければならない。余は便宜上、東亞細亞、卽ち西洋人が云ふ極東地方を東洋と名付け、西亞細亞、卽ち西洋人の所謂近東地方を以て、ペルシヤ・イスラム世界と名付けたいと思ふ。西亞細亞に限り斯ういふ長い名前を擇んで、これに對立する兩地方・東洋と西洋の簡稱と甚しく不均衡になることを顧ないのは、從來の歷史家があまりこの地方を重視せず、折角新しい名稱を製造しても、その內容が不明に思はれる虞があるので、此土地には嘗て波斯の大帝國が繁榮して其の文明が廣くは東西に、遠くは後世に迄光被したる後、イスラム敎が現はれて其の衣鉢を傳へ、現今もイスラム宗敎圈を形造つてゐる事實を想起して貰ひたいが爲に外ならぬ。

扨この三つの世界は大體に於いて、夫々相似たる社會的發展を遂げて來たのであるが、その時代區分は從來西洋史上に用ゐられ來つた古代、中世、近世の三階段を其儘採用して差支へないと思はれる。但し三つの世界に於いて、古代より中世へ、中世より近世への轉換期は必ずしも同時には起らない。概して云へばペルシヤ・イスラム世界が、その社會的成長が最も早く、東洋之に次ぎ、西洋が最も遲い。

古代・中世・近世の三期區分法は、先づ西洋の學者が西洋史を研究する便宜上から設けたものであるから、之を他の二つの世界に適用するに當つては、各時代の有する意義は、多少變更を加ふることを餘儀なくされる。蓋し、東洋史とか西洋史とかの狹い範圍に於いては非常に重大な意義を有すると思はれた事實も、更に廣い地域の歷史といふ立

場から見た時には意外にその重要さを減ずることがあるかも知れない。而して斯かる場合には一般に、より廣い立場に立つ評價の方が概して、より正鵠に近いものと認めねばならぬのである。

古代とは人類が原始的な部族生活より脱して、都市國家を形造り、それが發達して數十個、數百個の都市國家を含む一領域を支配する大帝國の實現に至る迄の時代である。斯かる大帝國の出現、及びその倒壞は、ペルシヤ・イスラム世界に於いて最も早く、ダリウス大王を以て代表さるゝ、アーケメニド王朝の波斯帝國は、西紀前五五〇年頃に成立し、五〇〇年頃極盛となり、三三〇年、北方の蠻族を率ゐたアレキサンデル大王の爲に滅された。ペルシヤ・イスラム世界の古代史は此時を以て終末を告げる。東洋にては西紀前二二一年、秦の始皇帝が支那を統一し、前漢が之を嗣いで、西紀前一〇〇年前後、武帝の時代極盛に達し、後漢の帝國が西紀二二〇年に滅亡してゐるが、此頃を以て東洋古代史の終焉とす可きであらう。西洋では羅馬帝國の事實上に成立したるが、西歴紀元前後であり、三世紀末東西に分裂し、三七五年、ゲルマン民族の大移動が始まつて、羅馬帝國は完全にその覇權を失墜した。此時を以て西洋古代史の終焉とすれば、そはペルシヤ・イスラム世界に比して七百年、東洋に比して百五十年を遲らせてゐると云へるのである。

大帝國の崩壞の後に來るものは、中世的地方分權の傾向である。之が西洋に於いては封建制度となり、ペルシヤ・イスラム世界に於いては封建的貴族政治となり、東洋に於いては官僚的貴族制となつた。而して斯かる貴族の精神生活に喰ひ入つたものは宗教であり、西洋には基督教、ペルシヤ世界には拜火教、而して東洋には佛教が流行した。之

が三つの世界に於ける中世的特徴であるが、この他に地方分權となつて邊境防備の薄弱となつたのに乘じて、夷狄の侵寇が屢々行はれたことも附け加へられねばなるまい。特にペルシヤ世界に於いては、北方よりする土耳古系遊牧民族の侵入の外に、南方からアラビア遊牧民の侵入があつて、最後にササン王朝波斯帝國の貴族政治を倒壞した。

西曆七世紀に於けるアラビア人の波斯征服は、同時に此の世界に於ける近世的特徴を有する宗教改革であつた。而して宗教改革の後に、學藝復興（ルネッサンス）が到來した。卽ちバグダツドに都したるアツバス朝教主の下に、波斯の文化、希臘の古典が復興されたのである。教主ハル・ナル・ラシド及びアル・マムンの在位せる、西紀八—九世紀の交がその黃金時代である。この頃からペルシヤ・イスラム世界は既に著しく近世的なものを有してゐた。云ひ換ふれば中世を脫して近世に入つて來たのである。

數世紀に亙る十字軍は、中世的な西洋社會をして次第に覺醒せしめ、遂に西紀十四・五世紀に至つて、先づ伊太利に學藝復興（ルネッサンス）の新運動を惹起せしめた。之を以て西洋近世史の開幕とするは何人も異議なく、ペルシヤ・イスラム世界の近世史の開始に比較すれば、約五世紀程遲れてゐるのであるが、中世の開始が既に七世紀遲れてゐることを思へば、この年代の相違は別に驚くに當らない。

然らば次に東洋に於いて學藝復興に類似の事實があつたかといふ問題になるが、そは西紀十一世紀を中心とする北宋時代に最も顯著に現れたる、社會文化の一大變動に之を求む可きであらう。果して然らば東洋にては、年代的に見て近世の到來が、ペルシヤ・イスラム世界に比して約二世紀程遲れ、西洋に比して約三世紀先行してゐることになる

のである。

北宋時代を以て東洋に於ける學藝復興期とすることは屢々漠然と稱へられ來つたことであるが、余はその內容を更に明確にする爲に、二三の現象に就いて、之を西洋の學藝復興と比較して見ようと思ふ。

因に云ふが、ともすれば世に歷史學を以て各個の社會なり、國民なり、個人なりの有する個性を究むる學問であるといふ意味を穿き違へて、個性は個々の內に於いて探究す可きもので、之を他と比較することは何等の益なきのみならず、寧ろその爲に個性を沒却する恐れありとして、比較研究を無視或は忌避せんとする者があつたならば、そは大いなる誤謬である。比較したるが爲に消滅するやうな個性ならば、そんなものは個性ではない。比較しては分析し、分析しては比較したる後に、最後に殘りたるものこそ個性と稱するに適應はしい。吾人の理想とする所は、相似の事物を比較して、その中に異質の物を認め、異相の現象を比較して其中に同質の物を分析剔抉し出さんとするにある。而して吾人の竊かに恐るゝ所は、その結論の當否よりも寧ろその手續きが十分に科學的であるか否かの點に存するのである。

二　東洋に於けるルネッサンスの存在

學藝復興（ルネッサンス）といふ概念は今日では殆ど常識的となつてゐるが、それが最も顯著に現はれ、同時にその內容が最もよく研究されてゐるのは西洋史上に於いてゞあつて、本來は單に西洋史を說明する爲に用ひられた言葉であるから、之を

擴充して、東洋史上にも應用せんとする時には、勢ひ、西洋史上に現るゝ現象を基本として、その類例を東洋史上に求むるやうな比較法を採らざるを得ない。併し斯かる方法は飽迄便宜的のものであつて、東洋史の研究が更に進歩したる曉には、改めて東洋史上の事實を基礎としてその類例を西洋に求める底の比較法も可能となり、寧ろ斯くしてこそ始めて、西洋の學藝復興(ルネッサンス)の世界史上に於いて有する意義が愈々明確となる可きである。以下項を分つて西洋の學藝復興と共通なる現象を東洋史上に求むれば、大凡次の如き事象が擧げらるゝであらう。

(一) 哲學。學藝復興(ルネッサンス)運動の中心思想はその文字の示す如く、一時代前の古典的黃金時代の回顧崇拜より來る復古思想である。西洋にては始め羅馬に歸るを理想とし、更に後に至つて希臘古典文化の復興を目的とするに至つたが、その目標が何れも中世にあらずして古代であるには變りがない。目標を古代にとれば、之は必然的に教會宗教の排斥に立至らなければならぬ筈であるに拘はらず、伊太利の人生主義者(ヒューマニスト)の對教會意見は甚しく不徹底であり、次の時代、北歐に宗教改革運動が起つて有終の美を濟すを待たねばならなかつた。

東洋に於いては北宋の中期西紀第十一世紀頃に儒學の復興が行はれて、所謂宋學なるものの基礎が築かれた。宋學には二つの使命があり、一は中世の社會を風靡したる佛教に對して、支那個有の儒教を發揚することであり、一は漢唐以來の傳統的なる訓詁學に對して、直接古聖賢の思想の眞髓に觸れんとする試である。訓詁學とは經典の文字の意味を解釋する學問の謂であるが、併し實際に就て之を見ればそは單なる文字の解釋を能事とする言語學ではない。原來儒教の經典なるものは、別に深き意味を有せざる文學作品に對して、特に深遠なる道德的解釋を施して、宗教的權

威を與へられて成立したるものである。されば字句の解釋は言語學的に行ふのでなく、その解釋自身が卽ち儒教の哲學なのである。漢より唐に至る迄、經書に附加せられた註釋が堆積整理されて五經註疏となり、その努力が更に繼續され、經書の範圍も擴張されつゝ宋初に及んで十三經註疏となつた。大體に云へば註は一經書を專門とする學派の解釋を凡そ師承の通りに書き記したるものであるが、疏には又別個の立場がある。註は個々の經書を對象として書かれてゐるが、疏は數個の經書が存在することを前提として、一個の經書を解釋するにも、他の經書の解釋と矛盾撞着せざるやう、若しも表面上經文の間に兩立せざる如き個處あらば何とかして兩者を相調和せしめんとするの努力と用意とを忘れない。從つて疏に於いては一種の煩瑣なる論理學を有してゐて、この點矢張西洋中世のスコラ哲學と一脈相通ずる點がある。宋學に於いては、凡て斯かる繁雜なる手續を廢して、單力直入直ちに經書の文を以て聖賢の言葉として玩味せんとするのである。

（二）文體。思想の內容と關聯して、表現の形式が問題となる。伊太利の學藝復興に於いては、思想を表現する言語の選擇に就て、全く對蹠的なる二つの態度が見られる。卽ちダンテは當時自身が實際に使用したるトスカナ方言を用ひて神曲を著し、之に反してペトラルカは、復古主義の立場より、純粹なる古代拉典語を用ゐて始めてその作品は永遠の生命を維持し得可しと考へた。

東洋に於いても北宋初期の思想變革期に際して、文學表現の形式が問題化してゐる。歐陽脩の古文復興の提唱はペトラルカの主張と軌を一にする。支那には中世、六朝より唐末に至る文學の潮流は四六駢麗を以て本流とした。唐代

に韓愈、柳宗元出でて古文、卽ち四六に非ざる漢以前の文體復興を唱へたが之を嗣ぐ者なく、宋初に柳開、李覯等出しも未だ大いに盛んならず、仁宗時代に歐陽脩等輩出するに及んで、始めて文壇の支配的勢力となるを得た。併し朝廷の詔令、大官除拜の制詔の如き儀式的の辭令には猶四六を用ふるを例としたが、治平四年(西紀一〇六七年)神宗卽位して司馬光を以て翰林學士に任ぜんとした時、司馬光は四六を爲(ツク)る能はざるを理由として辭退して居り、天子は之に對して、兩漢の制詔の如くにして可なり、と云つてゐるのは注意す可きである。今日より見れば唐宋の古文は必ずしも、漢以前の文體と同一ではない。併し唐宋時代の古文首倡者は、四六を廢すれば、否應なく漢以前の文を以て手本とせざるを得ず、從つてその文章は漢の文體に近きものと考へたのであらう。

支那では北宋時代前後より、古文の提唱と並行して、口語體文學が次第に流行して來るが、これ亦近世的なる現象の一として、ダンテ等の方言使用と對比さる可きものであらう。支那に於ける俗語使用の文學は必ずしも宋代を待たず、既に唐末より初まつてゐたこと、近時發見せられたる敦煌の遺書によつて知らるゝ通りであるが、宋都東京開封府に繁榮せる庶民大衆の娯樂生活が更に之を推進せしめたること、亦想像に難くない。

(三)　印刷術。既に思想あり、文章ありとすれば之を普及する手段が次に問題となる。西洋にて人生主義者(ヒューマニスト)等の學藝復興運動は、最初は狹き上流社會に於ける、貴族的の道樂であつたのが、印刷術の輸入による書物の普及の爲に、廣く社會にその影響を及ぼし、遂に澎湃たる社會的大潮流となるに至つた。伊太利に於ける活版印刷術は、西紀一四六五年に始まると考へらるゝが、一四八一年に神曲が註解をつけて出版せられた。

之を東洋に於て見るに、木板印刷の起原は古く唐代にあり、併し劃期的なる大出版は、宋の太祖、太宗二代に亙る佛教大藏經の出版に指を屈せなければならぬ。而して仁宗の朝に畢昇なる者が活字を發明したること、沈括の夢溪筆談に見えて居り有名なる事實である。漢字の形體が活字製造に不便なるよりして、彼の發明は直ちに流行するに至らなかつたが、木版製作技術の優秀さは之を償ひ、市上に書籍の洪水を氾濫せしめた。因みに畢昇の活動せる北宋仁宗朝は西暦十一世紀中葉に當り、西洋に於けるグーテンベルグの活版術發明の十五世紀中葉なるに比ぶれば、約四百年を先んじてゐるのである。

（四）科學の發達。科學、殊に自然科學の發達こそは、人類の思想に刺戟を與へて、古きものを棄てゝ新しきものを迎へしむる推進力である。西洋の學藝復興は復古運動なると同時に、進歩主義であり、進歩主義の根柢には、この時代に於ける著しい科學思想の發展が潜んでゐることは否定出來ない。而して當時の科學を代表するものとして、屢〻羅針盤と火藥の發明が引合に出される。

兩者とも、それが始めて何處に於いて、何人によりて發明せられたるかは、未だに曖昧模糊として定說を見るに至らない。併し乍ら記錄の上に現れたる所を比較するに矢張、支那の方が西洋よりも幾分宛早いのである。

東洋に於ける爆發性の火藥の記載は、嘗て矢野博士の說かれたる如く、北宋仁宗の慶暦年間（西紀一〇四一―一〇四八年）曾公亮等の編纂したる武經總要に見ゆるを以て最初とする。① 而してそれが火砲といふものに使用されたることは、續資治通鑑長編卷二七五。熙寧九年五月辛酉の條に、

河東路經略司言。北界人稱。燕京日闊火礮。令人於南界權場。私買硝黃餘硝。慮緣邊禁不密。乞重立告賞格。於是審刑院大理寺。申明舊條行之。

とあるによりて明かである。元より之は火藥を發射藥として用ひたものでなく、弩機を用ひて敵陣に投げ込んで爆發せしめたること、又矢野博士の說の如くであるが、熙寧九年（西紀一〇七六年）以前に於いて、それが遼に迄傳はつて、東洋に於いては別に珍しき智識でなかつたことは注目を要する。猶續資治通鑑長編卷三四二。元豐七年正月甲寅の條に、弓箭火砲箭百萬有餘を西夏國境の軍隊に頒つた記事が見えてゐる。然るに近頃影印されたる四庫全書本武經總要を見ると前集卷十。十三頁に、行砲車、軒車砲と題して立派な銅(?)身の大砲の圖が載せられてゐるので、大いに驚いたが、よく看るとどうやら武經總要の原圖ではなく、恐らく乾隆帝の虛榮心を滿足せしめる爲に、四庫全書本謄寫の際に攙入したものらしい。そは他の圖には必ず數行の說明がついてゐるがこの圖に限り何の說明もなく、他の砲車、火砲等は第十二卷に見えてゐるのに、これ丈を離して第十卷に載せねばならぬ理由がないからである。

西洋に於ける火藥の使用は、大體十三世紀に始まると考へられるから、此點に於いても、東洋は西洋に比して約二世紀程先行してゐる。

次に羅針盤に關して、單に磁針が南北を指し、それが精確に地軸の方向と一致せざることは、既に北宋神宗時代に活躍せる沈括（西紀一〇三〇—一〇九四年）の夢溪筆談に出で、それが航海に利用せらるゝことは、十二世紀初頭の萍州可談、高麗圖經等の書に見ゆること、桑原博士が既に說かれたる通りである。②

若しも西洋に於いて磁針を航海に利用し始めたる年代が、十四世紀の初頭とするならば、此點に於いても東洋は西洋に先んずること約二世紀であつた譯である。

猶この外に人生觀に對して甚深の影響を及ぼす可き、進化論の基礎をなすものとして、化石なるものゝ本質が、西洋學藝復興期の天才レオナルド・ダヴインチ(西曆一四五二—一五一九年)によつて眞相を看破せられたことは、確に注目に値する現象であり、ウエルズの世界歴史などにも特筆大書してあるが、[3] 斯かる智識は、東洋にては矢張四世紀も前に、例の沈括が夢溪筆談の中で述べてゐる所なのである。曰く、

予奉使河北。邊太行而北。山崖之間。往往銜螺蚌殼。及石子如鳥卵者。横亘石壁如帶。此乃昔之海濱。今東距海。已近千里。所謂大陸者。皆濁泥所湮耳。

この文章は化石其物よりも、之を含む地層の變遷に關して、より多くの興味を以て書かれてゐるが、之は元來支那に於いては、化石の本質に關して、西洋に於けるやうな宗教的な說話が無かつたから、別に之を啓蒙するの必要もなかつた譯であり、若しも化石なるものは神が宇宙創造の際に試驗的に製作せる動物の模型にして、生命を與へる前に不合格として山上に拋擲されたのだといふ樣な迷信があつたらば、沈括は恐らくレオナルド・ダ・ヴインチと共に之を排擊したに相違ない。沈括の說の燒き直しは朱子語類の中にも見えてゐる。

(五) 藝術の發達。學藝復興期の思想や科學は以後數世紀の急激な發達によつて、何時の間にか之を古いもの、過去のものにしてしまつたが、永遠に古くすることの出來ぬものは、學藝復興期に於ける藝術上の傑作、特に繪畫と彫

刻とであらう。但し兩者の中、彫刻は古典美術の復興であつたが、繪畫は之と趣を異にする。西洋古代の繪畫の傑作は今日存在せぬので、その技術を云々することが出來ぬが、若しもポムペイ遺跡の壁畫が之を代表するものならば、殆ど採るに足らず、學藝復興期の畫家も古典繪畫を見た形迹はないので、從つてその模範を古代に求むる所なく、自ら新生面を開拓しなければならなかつたのである。而して復興期の彫刻は漸く古典美術の壘を摩するに至つた頃より忽ちにして衰へたが、繪畫は之に反して、伊太利に於いて極盛に達すると同時に北歐諸國に刺戟を與へ、各國特有の畫風を形成せしめたるもので、その影響は今日に迄及んでゐると云つてよい。卽ち學藝復興は單なる復古でなく、進歩であり、時には創造であるといふ一面を、最もよく當時の繪畫が代表してゐるのである。猶繪畫に就ては後節更に詳しく論述する所があらう。

東洋に於いても北宋時代は繪畫史上特殊なる地位を有する。南畫、北畫共に大成されたのは北宋初期に於いてであり、北畫には李成、范寬、南畫には董源、巨然等出でて、大體現今支那畫の技法を基礎づけたのであつた。

以上列擧したる五項目を以て凡そ西洋に於ける學藝復興現象の重要なる要素を包括し得たりと思惟するが、之と殆ど平行の現象が、東洋に於ては、約三世紀前に經驗濟みとなつてゐた。吾人が東洋史を說くに當り、大體唐末宋初を以て、中世と近世の轉換期とするのは、斯かる理由に基くのである。

註① 矢野博士著近代支那の政治及文化所收、支那に於ける近世火器の傳來に就いて。

② 桑原博士著、蒲壽庚の事蹟（昭和十年岩波版）、九二頁羅針盤の使用。

③ H. G. Wells: The Outline of History（一弗版）p. 10.

三　最も遅れたる西洋の文化

東洋、ペルシヤ・イスラム世界、及び西洋の三つの世界が略々同樣の社會的發展を遂げ、ペルシヤ・イスラム世界が最も先行し、東洋之に次ぎ、西洋が最も遲れたりとすれば、次に起る問題は、後進の世界は自己の社會的發展に關して、先進の世界に負ふ所ありや否や、若しありとすればそは如何なる程度に於てゞあるかといふことである。斯かる問題の解決に對して非常なる困難が伴ふ所以は、第一に西洋人が西洋史の研究に當りて、ともすれば基督教的偏見を抱いて、他の世界よりの西洋に對する影響を殊更に過小に評價せんとし、彼等の專門的博識が反つて眞相を蔽ふに役立つといふ傾向にあること、第二、東洋の歷史學が豐富なる資料を有し乍ら、未だ十分に組織立てられざる現狀にあること、而して、第三ペルシヤ・イスラム世界に於いては、嘗ては絢爛たる文化を開花させ乍ら、近時に至つて大いに衰へ、史料も多く散佚したる上に、その研究が最も遲れて、他の世界との文化交渉に關する材料も甚だ缺乏し居ること等々の事情を數へることが出來る。

併し乍ら公平なる立場に立ち、常識的なる判斷を以て推測すれば、東洋並びに西洋の古代に於いて出現せる大帝國の組織を見るに、何れもペルシヤ世界に於ける先例、特にダリウス大王の帝國統治法に相類似する所あり、若し彼に範を取りたりと云はざる迄も、斯る大帝國の出現を可能ならしむる基礎となれる社會的發展に對して、ペルシヤ世界が常に影響を及しつゝありしことは否定出來ぬであらう。云ひ換ふれば、東洋及び西洋に於ける古代史的發展は、ペ

ルシヤ世界に指導されて來たのである。

次に來る中世的社會生活に於いて、ペルシヤ世界が東洋及び西洋に對して、如何なる地位を有し居たるかは、最も不明瞭である。併し乍ら中世は結局近世に發展し行く可き運命を持つてゐた。中世の社會は必ずしも停滯せる社會でなく、徐々に近世への歩みを辿つてゐたのであつて、近世的な要素は既に中世の間より、卵殼の中に孵化胎動しつゝあつたと見なければならぬ。その成長を絶えず外部より刺戟啓發しつゝあつたのが、ペルシヤ・イスラム世界に外ならなかつたであらう。

東洋の學藝復興がその幾許を、ペルシヤ・イスラム世界に負ふかは、此亦明かでない。併し乍ら唐の中期より多數の波斯人が支那に移住して、商業上に活躍し、續いてアラビア人が南海方面より支那と通商を開き、盛大なる貿易が兩世界の間に行はれたる事實を憶へば、ペルシヤ・イスラム世界が東洋に及ぼしたる影響は決して輕視す可からざるものあるを思はしむるに十分である。さり乍ら西紀十一世紀に至つて、東洋に學藝復興が起り、社會が面目を一新するに及んで、或點に於いては、後進の東洋が、先進のペルシヤ・イスラム世界を凌駕するに至つたことは亦注目に値する。例へば火藥、羅針盤に於いて、その發明の名譽が何れの世界に屬するやは猶疑問であるが、記錄の上に於ては東洋が幾分先鞭をつけて居り、陶器の製作術の如きは、元來は東洋がペルシヤ世界より輸入せるに拘はらず、宋代に於いて完成無比の域に達し、宋磁は逆にイスラム世界に輸出され、少しく異る事情の下にあるが宋の繪畫の如きも、イスラム世界に於いて賞讃の的となつてゐた。

西洋の學藝復興が、イスラム世界より多大の影響を蒙りたるは、萬人の等しく認むる所、特に學藝復興の中に於いての復古的ならざる、創造的部門に於いてその影響が甚深である。

東洋よりも約三世紀、西洋よりも約五世紀も早く近世史に入りたるペルシヤ・イスラム世界が、後進の東洋及び西洋に對して、指導的地位に立ちたるならんことは容易に、常識的に推測さるゝことであるが、次に提起さるゝ問題は、西洋よりも約三世紀の先進國たる東洋が、その學藝復興に於いて、果して何等かの影響を西洋の上に及ぼし得たか否かといふ疑問である。何故に斯かる疑問が特に生ずるか。そは第一に東洋の學藝復興は、その始に於いてペルシヤ・イスラム世界より刺戟を受けたるにもせよ、愈〻實現したる曉には、或部門に於いては著しく完成の度を增し、遂にペルシヤ・イスラム世界を凌駕して出藍の譽を得るに迄立至りたれば、若しも西洋が直接東洋に接したらんには、恐らく中間のイスラム世界を棄てゝ東洋より採る所ありしならんと想像さるゝこと。第二に東洋に學藝復興が起りたる直後、蒙古民族の世界大征服といふ劃期的事件が起り、東洋及びイスラム世界は擧げて蒙古民族の支配に歸し、この兩世界の間の交通が、恰も一國內の交通の如く容易となり、從つて直接間接の東洋と西洋との間の交通も亦著しく促進せられ、相互に影響を及ぼし得可き可能性が生じたること等により、東洋の優秀なる文化が西洋の學藝復興に何等かの寄與をなしたるに非ずやと、極めて常識的に思惟せらるゝ理由があるのである。

若しも火藥や羅針盤が支那に於いて最初に發明せられたりとするも、それが如何なる徑路によつてイスラム世界に入り、更に西洋へ輸入されるやうになつたかは現今明瞭にし得ないばかりでなく、永久に說明し得る望はなささ

うである。然るに此處に今後の努力によつては、意外に明白なる解決に到着しさうに見ゆる一題目がある。そは世界史上東洋に於いて最初に完成の域に達したる繪畫の技術が、イスラム世界に入り、更に之と殆ど同時に西洋にも入りて學藝復興期の繪畫の上に影響を與へたるならんと思はるゝ經緯である。若しこの事が十分に證明さるゝならば、東洋のルネッサンスと西洋のルネッサンスとの間に、單に類似の現象が平行して存在するに止まらず、その類似の現象の間には一脈の因果關係が存在したる事實が確認さるゝ譯である。

余は自ら量らずも、この問題に對して一個の答案を提出せんとする。余が蒐集し得たる材料は極めて貧弱、殊にペルシヤ・イスラム世界を說くに當り、隔靴搔痒の感に堪えぬものあるが、若しもこの小論文が機緣となり、眞の研究を招來する緣因（コスガ）ともならばやと思ひ、且つは併せて後進諸子にこの方面の研究に着手されんことを切望するの餘り敢て猥りに筆を執つた次第である。